

### 3.4. ボロブドゥール遺跡（インドネシア、二〇〇二年一月）

公務は韓国とインドネシアの原研の共同研究会議だった。世界的なテロ不安の時期で、暴動情報も耳に入る国だったから緊張した。が、ジャカルタでの公務期間中は仕事先の係りが同乗する車で移動と、会議室での「閉じた」空間での生活で何事もなく済んだ。日航系ホテルだったので和食の朝食で始まり、昼は職場でのインドネシア料理、夜は同宿の韓国代表陣との韓国料理会食と毎日が楽しかった。

終わってジョクジャカルタに飛んだ。仏教遺跡ボロブドゥールへのレジャー旅行である。その朝実は少々異様な頭痛を覚えて蒼ざめた。食欲も落ちている。下の方も完全に流動食である。気を付けていた筈なのに何かに当たったか、と前日の食事を思い出していた。レジャーの頭なのに、と真っ直ぐウィーンに戻る仲間が羨ましかった。が、大山鳴動、単なる小風邪だったようだ。ジョクジャカルタで一夜を過ごしたら元に戻っていた。

ボロブドゥールはジャワ島中部ジョクジャカルタの北に残る大規模な仏教遺跡である。インドネシアへ行く機会があればここ、とかねてから考えていた。「バリ島の方が」と言う人もいたが観光地バリよりはこのボロブドゥールへの関心が強かった。世界七不思議の一つであり、ユネスコの世界遺産指定も受けている。幸い仕事の相手が車で同行してくれた。同年代の技術屋で韓国との共同研究におけるインドネシア側の中枢である。車の中で簡単な歴史の背景を説明してくれる。建築は八、九世紀。その後、イスラム到来で仏教、ヒンズーは東に追われてバリ島に居を移す。十九、二十世紀での二度の大修復で現況になった。日本も復興に貢献。等々。とすると「バリ島の方が」仏教、ヒンズーの遺跡や文化がより多く残っているのか、と認識を改めた。

ゲートから二、三分歩くと木の間に遺跡が見えてきた。階段状の十層建ては、煩惱の世界から涅槃の世界までを登る過程を意味しているらしい。各階層の回廊（テラス）には夥しい仏像、釈迦誕生の物語、



ヒンズーの神々が処狭しと壁を被っている。壁画ならず壁像とでも言えば良いか。二年前に訪ねたインド・アジャンタの石窟を思い出す。あそこは大きな一枚岩を彫り込んだ構造だった。ここは二〇、三〇センチ角の切り出し石を積み上げた構造である。修復に際して見当たらない部分には「取りあえず」代用の石を嵌め込んである。下の回廊から順に上に登る。案内書を丹念に読んで再訪すればもっと壁像の意味が読めるだろうけれど、と思いながら、実物を見る前に深く勉強する意欲の湧かない吾が無欲さに後悔する。



下層部が方形の階層になっているのに対し、涅槃の世界を意味する上層部は円形の回廊になっている。大きなストゥーパが最上部に建つ。その下の三層の階層には壁の像に替わって等身よりやや大き目の仏



像が「祠」に座している。全部で432体、上層部に72体という釈迦像はそれぞれの段階での悟りの内容、誓願を表す手指の形（印相）を持っている。幾つかは訪ねる人のために「屋根」をはずして姿を見させている。多くは「祠」に納まっており、小さな「窓」から手を入れて像の手を触れて唱えれば願いが叶う、と多くの人が手を差し入れている。私も手を入れて願い事を心に描く。

基底部に降りて園内を歩く。全景の写真を撮り、百五十年に亘ったと

いう構築時の「彫り師」達に思いを馳せる。出口近くで「像乗り」に誘われる。乗ってみる。アブダビで乗った駱駝は鞍なしの裸乗りだったが、この象乗りは椅子に座るので安定感は充分である。御者に制御されて数分の散歩を楽しむ。門をでると売り子が騒がしい。写真入の解説書は欲しかったので値段を尋ねると「45 \$」と言う。「高い」「幾らなら買うんだ」と定型のネゴが始まる。買う気のない場合は、数字を言わない方が良い。買う気のある場合が難しい。最終価格は双方の言い出し価格の間で落ち着くのだから。気の良い日本人の私にはこのネゴのこつが今一分らない。「最初は向こうの言い値の10分の1」のお勧め値を言い出すにも勇気が要る。今日は先ず「10 \$」と宣言。「原価35 \$なんだ、40 \$でどうだ」と来る。「10 \$」を繰り返す。交渉決裂も予想通り。諦めて歩きだすと値下げが始まる。頑なに「10 \$以上は駄目」を繰り返す。車に乗り込みかけると遂に、「10 \$で良いよ」と商いが成立。これは上手く行った例。いつもこう行く訳ではない。今回買い損なったのは「三枚五百円」のTシャツ。ちょっと柄に拘ってタイミングを逸した。現場を去ってから「あそこで妥協すべきだった」と後悔。もう遅い。

車はボロブドゥールを出て東のプランバナナに向かう。暑さの中で睡魔に襲われる。同行の仕事仲間はお更だろうに、と感謝する。昼食に立ち寄ってくれたのは「生け簀の割烹」。茅葺きの屋根、孟宗竹の柱、生け簀の上を走る渡り廊下、その生け簀に泳ぐ錦鯉。日本のどこかを思い出させる光景だが、食卓に出て来るのは刺し身ではなく鯉の甘煮とから揚げ。添え物のキャベツやトマトに躊躇していると、仲間はキャベツの葉にライスを乗せて器用に手で巻くように食べている。そう言えば、この国ではまだ箸やフォークより手を使う食事が今も多数派なのだ。禁酒のモスレムを前に遠慮がちにビールを飲む。

ヒンズー遺跡プランバナナも面白かった。シヴァやヴィシュヌなどの神の名も二年前のインド訪問以来馴染んでいる。あの時買った石像が今も自宅の居間に有るのを思い出す。プランバナナは寺院が群立している。今も修復進行中で、基礎部の礎石片があちこちに山になっている。修復を終えた中央の大きな主殿、両側に建つやや小ぶりの二殿は何れも背高の四角錐の形をしている。配置が仏陀と脇土の関係に似ているがもちろん無関係だろう。主殿にはシヴァ神が祭ってある。中二階の回廊にはボロブドゥールを小型にしたような壁像が続いている。同行の仲間がヒンズーの説話を語ってくれた。壁像はその物語を絵巻物風に描いている。時計周りに一周すると物語が完結する。

「説話ラーマヤナ」<sup>1</sup>。善王ラーマは妻シンタと平和に暮らしていた。そこへ黄金の鹿に姿を変えた妖怪が現れる。悪魔ラヴァナの使いとしてシンタをかどわかしに来たのである。策は成功してシンタは誘拐される。ラーマの部下ジャユは鳥に姿を変えてシンタの行方を追う。が、返り討ちに遭ってしまう。瀕死の息でジャユはシンタの居場所をラーマに伝える。アレンカの島に幽閉されていると言う。実は今のスリランカだそうである。ラーマはもう一人の部下ハヌマンを向かわせる。ハヌマンは白い猿に姿を変えてシンタに近づく。王ラーマからの指輪をトンタに届けた後、ハヌマンは悪魔ラヴァナの館を破壊し衛兵と遣り合うが捕らえられる。ラヴァナはハヌマンを火あぶりに処すがハヌマンは逃げ延びて復命する。王ラーマは平和交渉に方針を変えて使者を送るが、逆に悪魔ラヴァナを怒らせてしまい捕らえられる。使者を殺そうとする悪魔ラヴァナを弟のクムボカルノが諫める。ラヴァナはクムボカルノを国外に追放して



しまう。ラーマとラヴァナの間に全面戦争が始まる。ラヴァナの兵は全滅し、駆けつけたクムボカルノも死ぬ。ラーマとラヴァナの一騎打ちは長い戦いになる。が、遂にラーマはラヴァナを倒す。そのラーマのもとにハヌマンはシンタを伴って来る。シンタは難を越えての夫との再会を喜ぶが、ラーマはシンタの純潔を疑い拒否する。燃え盛る火の中に飛び込んで身を清めよと要求する。

<sup>1</sup> ラーマヤナはマハーバーラタと並んで東洋の二大叙事詩とガイドブックにある。二世紀から四世紀にかけての作とある。インド原産だがインドネシアまで広まり、演劇、影絵、人形劇の題材になっている。西洋の叙事詩と言われるイリアス、オデッセイを思い起こしても人の心は男と女、そして確執かと思う。極めて人間的で素晴らしいではないか。

物語はここでハッピーエンドとその逆の二つに分かれるのだと言う。神の力で火の海を渡りきったシンタが幸せな生活に戻るストーリーは主殿の回廊に語られている。左の脇殿の回廊では逆の結末に終わる。夫に潔白を疑われたシンタは、疑われたこと自体に悲嘆し火に身を投げて自殺する。

プランバナンを出てサリ、カラサンと言った点在する遺跡を廻る。緑の平原の遠くに微かに山並みが見える。記憶にある風景だなあ、としばし佇んでいると飛鳥の村が浮かんできた。また奈良を訪ねたい気持ちが押し寄せてくる。

ジョクジャカルタに戻り、夜は「演劇付きバフェット」。その演劇はハッピーエンドの「ラーマーヤナ」。レストランの奥にある小さな野外舞台での90分だった。日中のプランバナンでの壁像、同行の仲間のちよっとした補足説明が役立ってよく分った。

翌日ジョクジャカルタの街を少し歩き、夕方の便までの少しの時間を仲間の官舎で過ごした。快適な水風呂を貰い、ウィーンまでの24時間の帰路についた。